資料 2

ヨーロッパ
家庭菜園
レポート

ドイツでは初めての有機農業支援〝投資〟モデルが誕生していた

ロシア・ダーチャ～ドイツ・クラインガルテン視察の旅

天野礼子さん

あまのれいこ●
アウトドアライター。「日本一川にうるさい女」と自他ともに認める。近年は「森」の著作も多いが、高知の山下一穂氏との出会いから有機農業を取材し「有機な人々」（朝日新聞社）を2010年7月に出版した。「高知439国道有機協議会」の事務局長も務める。

ロシアでは国民の3分の2が持っているという庭つきのセカンドハウス〝ダーチャ〟。ドイツでは、都市の集合住宅の2階以上に住む国民なら誰でも、月3千円ほどの費用で借りることができる〝クラインガルテン〟。今年の野菜づくりが終わる直前に両国を訪問し、その様子をレポート。特にドイツでは有機農業を支援する投資の仕組みが生まれていたことがとても興味深かった。

24年前にラシコフスカヤ・ザンナさんとその夫が国から与えられたダーチャと、二人でつくった木の小屋。

［ロシア］ダーチャ

ピョードル皇帝が家臣に土地を与えたのが始まり。スターリン、ゴルバチョフも食糧生産政策とした

畑の野菜を食べて経済難を乗りきった

養老孟司さんと私は、国土交通省住宅局内に「〝木の家づくり〟から林業再生を考える委員会」をつくっている。養老師は「現代も〝参勤交代〟すべき」とおっしゃる。来るべき地震に備えて避難地をつくる。石油が枯渇したときには流通が止まるから、自分で食糧をつくる訓練をしておく。身体を動かすことが現代病の鬱を解消する。田舎の畑に木の家をつくることが、地域材の出口になる。といった効用があるか

らだ。

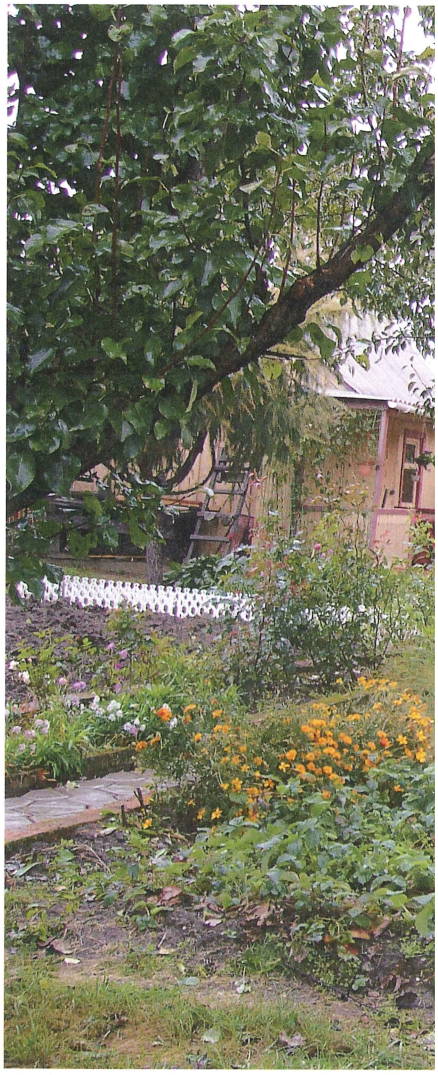
それならば事例としてロシアとドイツを見ようと視察した。

ロシアはアムール川の河口、極東地域のハバロフスクへ。

ダーチャは、ロシアの国民の8割が持っているという、庭つきのセカンドハウス。名前の由来は、帝政ロシアの17世紀に、ピョードル一世が家臣に土地をダーチ（与える）したことから。

ソビエト時代にはレーニンが食糧増産のためにダーチャを全土に作る計画を立てたが、実現できたのは戦後のスターリン時代で、今から45年前だった。

9月28日に訪問した2か所は、25年前にゴルバチョフ大統領がペレストロイカ（改革）の一つとして全土につくった時のもの。ペレストロイカが失敗に終わり経済的に苦しかった時代も、人々はダーチャで野菜をつくって乗りきったといわれている。



1.堆肥づくりのシステムは日本と同じスタイルだった。2.ザンナさんがつくった野菜とビン詰め

都市に近い広い遊休地にまとまってつくられている。たとえばザンナさんは、電力をつくる部門の労働者団体がハバロフスクのアムール川の中州に造成した土地をもらい、畑を開墾し小屋を建ててから24年になる。同じ電力会社に勤めている娘さんは、10年前にプーチン大統領によってダーチャの権利売買が認められた時に、維持できなくなった父の友人から権利を買って、両親のダーチャの隣にあらたな畑と小屋をつくった。

ザンナさんの堆肥箱は木組みで、日本のものとそっくり。「農薬は使わないのですか」とわざと聞いてみた。「自分たちが食べるものに、どうしてわざわざ毒である農薬を、買ってまで入れるの」と不思議な顔。

ダーチャコンテストに2回入賞しているアレクサンドルさんはチップを畑の中に敷いて、雑草が茂るのをセーブしていた。

「日本版ダーチャ」である日本各地のクラインガルテンでは有機農法を教えているところが少ないことを話すと、「日本人は自分の食べる物の安全をあまり気に掛けない国民なのかね」と笑われてしまった。

ロシアではダーチャが今、「安全な食糧を自分でつくる」ことを好む若い世代によって再評価されつつあるようだ。忙しい現代人は都市の中に生きることを選択したかわりに、再びダーチャに向かうということか。

3.ダーチャ・コンテストに2回優勝したペトロフ・アレクサンドルさんは、木材のチップを使って雑草を茂らせない工夫をしていた。4.アレクサンドルさんと彼の小屋。

ハバロフスクには「ダーチャ協会」がある。そこには近年、日本人がツアーを組んで遊びに来ている。「よその国へ来て、観光といいながら労働を提供してくれるのはありがたいが、聞いてみると、日本では農地を借りたり、手に入れにくいようだね。もっと自分の国でダーチャがつくれるように政治家を動かせばいいのに」といわれた。

おっしゃるとおり。農地法の改正を政治に求めるといった〝行動〟を私達は取るべきなのだ。「政治畑」も耕す必要がある。

［ドイツ］クラインガルテン

産業革命時に子供たちの健康のために、一人の医師が「小さな庭」を提唱。今に続く〝緑の都市政策〟でもある

自宅から15分にあり よい運動になる

クラインガルテンは「小さな庭」の意味。シュレーバー博士という医者が提唱したので、シュレーバーガルテンとも呼ばれる。ドイツでは19世紀から、「クラインガルテンには、野菜か果実か花をつくらなければならない」という規則ができていた。

都市の集合住宅の2階以上の部屋に住む国民には（移民でも）誰でも持つ権利があり、月に3千円くらいの費用で100坪くらいの土地が借りられ、人々はそこに畑や庭をつくり、手づくりの小屋を建てている。都市に住む国民の健康を考えての「緑の都市政策」が200年近くも続いているということだ。

クラインガルテンについては本誌2009年秋号で廻谷さんが紹介しておられるので、今回私は、10月21日からのドイツ訪問で初めてキャッチした情報を二つ紹介したい。

一つは、10月25日までに訪れたフライブルグやフランクフルトのいくつかのクラインガルテンで、韓国政府の視察団の写真とサインを見たこと。どうやら大統領就任と同時に首都の中に清流をよみがえらせたことで世界中のド肝を抜いた李明博大統領は、今度はクラインガルテンで「安全な食糧」を国民自らにつくらせ、「都市の緑化」まで狙っ

「今年の花はきのう霜が降りて終わってしまったわ。枯葉を集めておいて堆肥をつくるのよ」とカールスルー市のヴァルトラウト・ゴルドシュミットさん。奥の小屋は夫とつくった。

フランクフルトの「鉄道農業連盟」のクラインガルテンは、7分おきに後ろを列車が走る。

ドイツのクラインガルテンは、写真奥に見えるグレーの集合住宅などの2階以上に住む国民に貸し出される。住民それぞれは近くのクラインガルテンを借りて、小さな小屋もつくっている。写真前方は「鉄道農業連盟」のクラインガルテンの畑。

ているように思える。それは今回クラインガルテンを訪れた視察団の質問が、有機農法に集中していたと聞いたからだ。

ドイツでは、クラインガルテンでは有機農法が当たり前。ロシアのダーチニキ(ダーチャを持っている人)もドイツのガーテナー(クラインガルテンを持っている人)も、日本がそうでないのが意外そうだった。

フランスが今、122パーセントもの総合食糧自給率を持っているのは、1970年代から都市に集中している人口を田舎に帰す政策がとられたからだ。

日本政府が地方行政と各地でこれまで造ってきたクラインガルテンは、立派すぎる〝箱物行政〟。しかも、5年までしか借りられない。この現状を私たちは反省する必要があるだろう。

1927年から祖父、父と引き継がれ、自分は1966年からここで遊んできたと話してくれた79歳のヴァルター・オフトリングさん。鉄道会社を引退したあとも毎日、妻とこのクラインガルテンへ通ってきている。

有機農業への投資が地域の自然を守る

ドイツで得た二つめの情報はドイツで初めての、住民が投資する〝有機農業ビジネスチェーン(輪)〟ができていたことだった。環境と大学の都市として世界に知られるドイツ南部、フライブルグの近郊にあるアイヒシュテッテン村を訪ねた。

有機農業ビジネスを総合的に営む「地域財産会社ヒス社」。その一翼を担って、農作物を作ったり、販売をしている「有機農業有限会社フェルドマン社」を訪問し、畑ではヤニス・ツエントラーさんから話を聞いた。

この会社は、バイオダイナミック農法を指導・推進する世界的組織「デメター」の承認を得て運営されている。

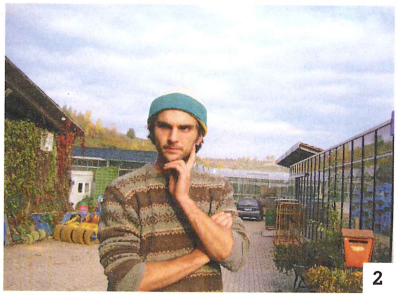
ヒス社には、他にも、物流、ワイン製造、ケータリング、果樹園、酪農、レストラン、食肉・牛乳・チーズの製造を営む会社が加わっていて、それらがチェーン(輪)となって運営されている。

そしてそれらは、有機農業を通じて、この地の地域財産をひとつにまとめて〝地産地消〟する役目を果たしている。この地域で、人の手が加わって「文化」となってきた自然や環境を、そのまま維持しつつ、それを持続的に利用するための役目を担っているといえるだろう。

だから地域の人々はこの〝チェーン〟に投資して、自分たちの地域を守ることに力を貸しているのだ。さらに、フライブルグに住む環境意識の高い市民たちがその後ろにはいて、アイヒシュテッテン村の人々の生き方を支持する〝もっと大きな輪〟も形成できているということだろう。

自然有機農作物卸販売会社リンクリン社の代表、ウィルヘルム・リンクリン氏は教えてくれた。「この地の人々が有機農業で固まったのは、かつてここに原発が来ようとした時に人々が闘い、代替エネルギーについて考えたり、人間の身体によいものだけを口から入れるべきと考えたから。クラインガルテンで野菜を作ったことのある人は、手間に高いお金を払う。有機農法を優先する方向にむかいやすいね」、と。

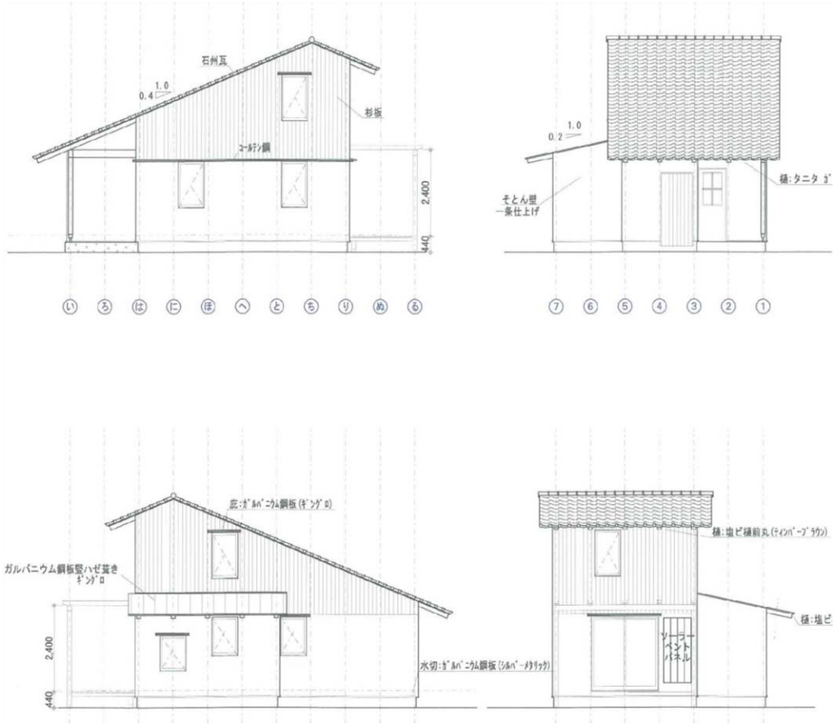
わが国にも、有機農業に投資するこのような〝チェーン〟の誕生が待たれる。

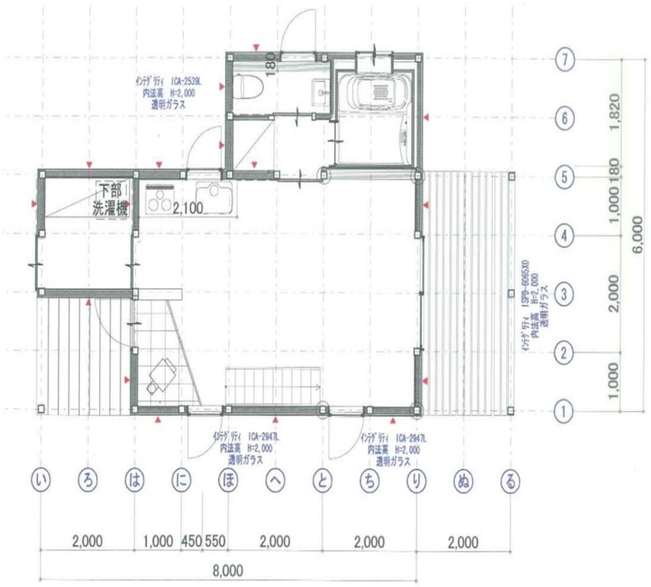


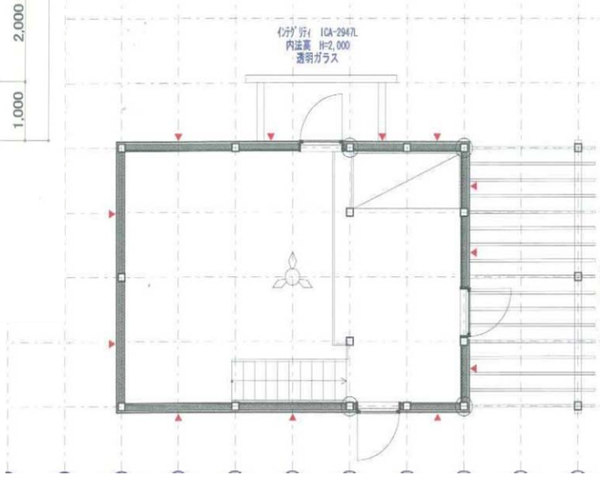
1.有機農業有限会社フェルドマン社に勤めるヤニス・ツエントラーさんが担当する畑。左手に持っているのは「黒大根」。辛味大根のような味がする。右手は「金の玉(ゴールデンボウル)大根」。これは甘く、煮物に使われる。 2.ヤニス・ツエントラーさん。この会社を含む、有機農業ビジネスを営む地域財産会社は、地域住民が出資して支えている。 3.リンクリン自然有機農作物卸売会社の代表ウィルヘルム・リンクリンさんと息子が経営する小売店は、バックヤードに大きな卸倉庫と会社があり、近くのフェルドマン社の野菜も仕入れている。

小さな週末農業小屋。 吉賀町柿木村

（クラインガルテン・ラウベモデル）







1階　　36 ㎡
ロフト　　8 ㎡
延床面積　　44 ㎡　（13坪）